Crescendo

MEDIKIT ARTS CENTER くれっしぇんど

2026.2
vol.162

new

劇場に、新しい立ち寄り場所ができました。

11月にオープンした Cafe & Restaurant THE SANTEL。
公演の前に、練習の合間に。
ひと息ついてから、劇場へ。

Contents

✓繊細で美しい音の森へ——
ヴィオラ・ダ・ガンバの魅力をひもとく
ひなたのバロック#7

✓オルガンって面白い!
原田真侑さんと音の旅
パイプオルガン プロムナード・コンサート vol.177「オルブラ」

✓県内各地に音楽を届けて——
音楽アウトリーチ事業 1年間の振り返り

✓30周年を彩った特別プログラムを振り返る

✓音、舞い、その先へ——
総監督が描く新しい音楽祭の姿

メディキット県民文化センター 広報誌
MEDIKIT ARTS CENTER

ひなたのバロック #7

バロック音楽をさまざまな角度から楽しむ「ひなたのバロック」。7回目の今回は、ヴィオラ・ダ・ガンバの第一人者・平尾雅子氏と、ドイツ文学研究者の森下勇矢氏を迎えます。企画・監修の大塚直哉氏のチェンバロとともにヴィオラ・ダ・ガンバの繊細で美しい響きを、文学や絵画の話題も交えながら味わっていただく本公演。本誌では、公演をより楽しんでいただけるよう、ふだん触れる機会の少ない「ヴィオラ・ダ・ガンバ」の魅力をご紹介します。

ヴィオラ・ダ・ガンバってどんな楽器 !?

「ヴィオラ」と聞くと、ヴァイオリンより少し大きい中音域の弦楽器を思い浮かべますが、16世紀ごろまでは“弦楽器全般”を指す、もっと広い意味で使われていました。そして「ガンバ」という言葉は、サッカーチーム「ガンバ大阪」でもおなじみですが、イタリア語で「脚」という意味です。つまり「ヴィオラ・ダ・ガンバ」は直訳すると“脚のヴィオラ”、すなわち“脚に挟んで演奏する弦楽器”のことです。見た目はチェロに似ていますが、実はチェロの先祖ではなく、まったく別のルーツを持つ楽器で、弦は、6本～7本。低い音を好むフランスでは低音側に1本付け加えた7本弦が好まれました。弓の持ち方は、チェロのように上から弓を持つ「オーバーハンド」ではなく、二胡や馬頭琴のように、スプーンを持つように下から握る「アンダーハンド」で演奏します。

ガンバの起源と、ヨーロッパでの広がり

楽器の起源には諸説ありますが、指で弦をはじく撥弦(はつげん)楽器「ビウエラ」が先祖といわれています。たまたまこのビウエラの弦を弓でこすってみたらいい音が…そんな小さな偶然の発見から、擦弦(さつげん)楽器「ヴィオラ・ダ・ガンバ」が生まれたと伝えられています。こうして誕生したヴィオラ・ダ・ガンバは、ルネッサンスからバロック期(16～18世紀)のヨーロッパで広く親しまれ、王侯貴族の宮廷のたしなみとしてはもちろん、教会や市民生活の場でも盛んに演奏されました。とりわけフランス国王ルイ14世の時代(1680～1700年初頭)に、ヴィオラ・ダ・ガンバは黄金期を迎えます。その中心で活躍したのが、宮廷音楽家マラン・マレ。本公演では、そのマレが宮廷の偉大な音楽家リュリの死を悼んで作曲した《リュリ氏へのトンボー》など、美しく語り掛けるような作品の数々を取り上げます。

魅力的なガンバの豊かな響き

当時の音楽は、宮廷のサロンや教会など小さな空間で演奏されることがほとんどでした。そこで求められたのは、「大きな音」ではなく、「音色の美しさ」や「響きの豊かさ」。その点で、弦の数が多いヴィオラ・ダ・ガンバは理想的な楽器でした。弦同士が共鳴し合うことで、指を離しても響きが残るほど豊かな余韻が生まれます。これこそが、ガンバの最大の魅力です。繊細で美しいヴィオラ・ダ・ガンバの音色を、チェンバロとともに、ぜひ会場でじっくりとお楽しみください。

見た目はチェロに似てるけど
近くで見ると、こんなに違う

「ヴィオラ・ダ・ガンバ」

豆知識 戦国武将も聴いた！ヴィオラ・ダ・ガンバ

日本にヴィオラ・ダ・ガンバがやってきたのは、安土桃山時代。ポルトガルの宣教師によって日本に伝えられ、織田信長や豊臣秀吉たちもその演奏を耳にしました。また、天正遣欧少年使節がガンバを演奏したことも文献に残されています。

公演情報

2/23(祝月) ひなたのバロック#7
～メランコリーの森
13:30開場　14:00開演

会場：演劇ホール
出演：

大塚 直哉
(企画・監修／チェンバロ)

平尾 雅子
(ヴィオラ・ダ・ガンバ)

森下勇矢
(ドイツ文学研究者)

曲目：M.マレ：「リュリ氏へのトンボー」《ヴィオール曲集》より
J.J.フローベルガー：「組曲ニ長調」　ほか

オルガニスト
原田 真侑
Mayu Harada

オルブラ

土曜日の朝は、オルガンでブランチを…

コンサート・ソムリエによる楽しいお話を交えながら、「舞曲から生まれたオルガン音楽」をテーマにお届けする、今回の「オルブラ」！オルガニストには、フランスでも研鑽を積み、所沢ミューズ第 4 代ホールオルガニストを経て現在は明治学院ほか各教会・大学でオルガニストとして活躍されている原田真侑さんをお迎えします。
3月14日(土)に迫る公演に向けて、今回のプログラムの聴きどころや、オルガンの魅力についてうかがいました。

── オルガンとの出会い、そしてオルガニストを志すきっかけは？

小学3年生(8歳)のとき、神戸松蔭女子学院大学で開かれた「子どものためのパイプオルガン体験講座」で初めてオルガンに触れました。ひとつの楽器から生まれる多彩な響き、そして弾き方のわずかな違いで音色や音楽が大きく変わることに衝撃を受けたことを今もよく覚えています。
また、講座で出会った上野静江先生、大塚直哉先生、長谷川美保先生の、演奏もお人柄も本当に素敵で、「オルガニストになったら、私もこんな大人になれるかも?」と憧れを抱くようになりました。
その後、中学受験の時期には音楽から少し離れたこともありましたが、この講座だけは欠かさず参加し、高校生になって将来を真剣に考えたときに、「やっぱりオルガニストになりたい」と思って、そこで進む道を決意しました。

── 原田さんが考えるオルガンの魅力を教えてください。

まず、「同じ楽器がひとつとして存在しない」というところです。ストップ(音色を選ぶ装置)の種類や数、鍵盤の数、楽器そのもののサイズまで、オルガンは一台ごとに個性があり、同じ曲を弾いてもまったく同じ演奏にはなりません。それが難しさでもあり、面白さでもあると感じています。
さらに、ストップの選び方や弾き方(タッチ、アーティキュレーション)など、表現の工夫次第で音楽が無限に広がるところも魅力で、演奏のたびに新しい発見があります。
また、中世から現代まで長い歴史を持つオルガンは、そのレパートリーも多種多様で膨大な数があることもオルガンならではだと思います。

── 原田さんは、ご自身をどんなオルガニストだと思いますか？

とにかくオルガンが好きです。そのひと言に尽きます。弾くことはもちろん、聴くことも大好きで、その‘好き’の気持ちは誰にも負けません!? 大好きなオルガンの魅力をもっと多くの方に知っていただきたい、好きになっていただきたいという思いが、私の活動の原動力になっています。
演奏やレッスン、研究を通して、一人でも多くの方にオルガンの素晴らしさや魅力をお伝えできたらいいなと思っています。私自身、子どもの頃の体験講座でオルガンに出会って人生が変わりましたので、同じような機会を提供する活動も大切にしています。オルガニストを目指すかどうかに関係なく、人生を歩んでいく中で、“そういえばオルガンを見たことがあったな、また聴いてみようかな”とふと思い出してくださる方がいたら、とても嬉しいですね。

── 今回のプログラム・テーマ「舞曲から生まれたオルガン音楽」について、聴きどころを教えてください。

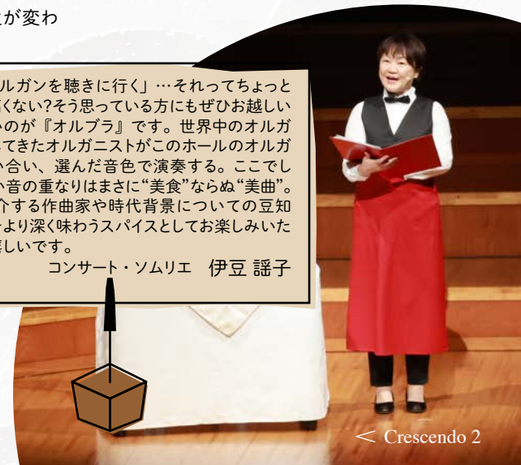
“舞曲”とは、踊るための音楽、あるいは踊るためのリズムや形式を使った音楽です。古くから世界各地で踊りの文化が発展してきました。踊りとは、人間の根幹にある感覚ではないでしょうか。今回は、その感覚をオルガンの演奏から感じていただけたらと思います。
ルネサンス(16世紀)から近現代に至るまで、幅広い時代・国の作品を選びました。各曲の雰囲気は様々ですが、不思議と一貫したスタイルが感じられるところがあると思います。ぜひ力を抜いて、オルガンの響きと舞曲のリズムに身体を委ねてみてください！

公演情報

パイプオルガン プロムナード・コンサートvol.177
3/14(土) 『オルブラ』
11:00開演

会場：アイザックスターンホール
出演：オルガニスト=シェフ：原田真侑
司会=コンサート・ソムリエ：伊豆謡子
曲目：L. ヴィエルヌ：シシリエンヌ
G. リテーズ：プレリュードとフーガ風ダンス
J. S. バッハ：パッサカリアとフーガ ハ短調 BWV 582　ほか

「パイプオルガンを聴きに行く」…それってちょっとハードル高くない?そう思っている方にもぜひお越しいただきたいのが『オルブラ』です。世界中のオルガンを演奏してきたオルガニストがこのホールのオルガンと向かい合い、選んだ音色で演奏する。ここでしか聴けない音の重なりはまさに“美食”ならぬ“美曲”。私がご紹介する作曲家や時代背景についての豆知識も、曲をより深く味わうスパイスとしてお楽しみいただけたら嬉しいです。
コンサート・ソムリエ　伊豆 謡子



音楽アウトリーチ事業

1年間の振り返り

平成23年度からスタートした「音楽アウトリーチ事業」も、今年で15年目を迎えました！これまでに、累計1万人を超える多くの県民の皆さまに音楽をお届けしました。
2年を1期として活動している登録アーティストも現在8期生が活動中です。今回は第8期として活動中の3名（2組）のアーティストから1年間の振り返りと共にご紹介いたします。

フルート
黒田 真実さん
日向市出身。京都市立芸術大学音楽学部管・打楽専攻卒業。これまでに桐原直子、黒木智子、大嶋義実、富久田治彦、中川佳子の各氏に師事。現在は後進の指導にあたるほか、宮崎県内を中心に演奏活動を行う。

ピアノデュオ
北川 倫代さん
武蔵野音楽大学器楽学科ピアノ専攻卒業。PTNA グランミューズ部門Dカテゴリーにおいて2005・2008年度全国大会入賞。
これまでにピアノを片野郁子、矢野月子、穐吉慶子、猿木宣子、パイプオルガン・チェンバロを大塚直哉各氏に師事。

ピアノデュオ
坂本 真理さん
宮崎県出身。大阪音楽大学音楽学部器楽学科ピアノ専攻卒業。これまでに、有川サチ子・故岩嶋純子・永井淳子の各氏に師事。在学中、第12回ピアノ・グランド・コンサートにて、ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団と協演。第6回宮日音楽コンクール優良賞。

音楽アウトリーチとは？

コンサートへ行く機会や生の音楽に触れる機会の少ない方々に音楽をお届けすることを目的として、平成23年度より実施している完全訪問型の演奏活動です。県内の幼・保園、小・中学校、そして福祉施設など年間15公演程度を行っております。

3名から1年間を振り返っての感想を紹介します。

黒田真実さんよりメッセージ

初めて会う子どもたちを対象に行うので、毎回不安を感じることも多いですが、毎公演ランスルー（通し稽古）をしてアドバイスをもとに本番を行うので、公演を始めると子どもたちの反応もあってスムーズに進めることができます。訪問先の雰囲気や年代によって、リアクションやその場の空気も異なり毎回楽しく演奏ができています。クラシック音楽に馴染みのない方々に対して、どうやったら親しみを持ってもらえるか、楽しんでもらえるかを考えてプログラムを組み、次年度も皆様に笑顔になってもらえるような公演を目指していきたいです。

北川倫代さんよりメッセージ

約10年連弾を続けている坂本さんと、演奏の機会が増えると楽しい経験も増えるねと話し、アウトリーチ第8期に応募しました。下見から本番まで基盤は同じでも、訪問先ごとに曲や反応が異なり学びが多くありました。保育園・小学校とも温かく迎えていただき、演奏する私たちが一番楽しませていただいたと感じています。来年度も視野を広げ、得たことを演奏に生かしていきたいです。

坂本真理さんよりメッセージ

第8期生としての活動が始まり、まずは自分達で様々な事を考えプログラムを作り、ランスルーでは、自分達だけでは気づけない点についてアドバイスを頂きました。その中で共通して感じた事は、「まず自分たちが音楽を楽しみ、伝えること」という事でした。実際に訪問させて頂いた際には、会場の皆さんと音楽を共有できていると感じられる瞬間がありました。これからも、音楽の魅力を伝えられるよう、活動していきたいと思います。

令和８年度 アウトリーチ開催団体を 募集中

対象となる施設は、幼稚園・保育園、小・中学校、各施設等です。申込みは、2026年2月28日（土）必着。詳しくは劇場HPまたは、応募チラシをご覧ください。

＼ 支えてくださったすべての皆さまへ ／

開館30周年の感謝を込めて。

1993 年に開館し、県民文化の拠点として歩んできた宮崎県立芸術劇場。長期休館を経て再び幕を開けた今年、劇場を応援し続けてくださった皆さまへの感謝の思いを込め、休館中に迎えた 30 周年を記念する特別プログラムを４つお届けしました。舞台芸術をより身近に、そしてより多くの方へ届けたいという願いを込めて実施した、それぞれの企画を振り返ります。

1 おさんぽツアー feat. 県立美術館

6月15日（日）　演劇ホール

ともに開館30周年を迎えた宮崎県立美術館とのコラボ企画として開催したおさんぽツアー。宮崎県出身の画家・瑛九による作品《田園B》にまつわる“美術館と劇場のつながり”をご紹介しながら、美術館と劇場をめぐりました。

劇場では、《田園B》の一部を再現した緞帳をご覧いただいた後、普段は入れない舞台裏へ。オペラカーテンの動き、舞台が上下して現れる“オーケストラピット”、客席から見えない奈落、舞台上からの客席の眺めなどを、スタッフの解説とともに体験。参加者は興味津々で普段は目に触れない仕組みを間近で見るたびに驚きの声が上がりました。劇場の“からくり”に触れ、舞台芸術が生まれる空間の奥深さを体感していただくひとときとなりました。

2 リラックス・パフォーマンス 宮崎公演 ～世代、障がいをこえて楽しめるコンサート～

9月28日（日）　演劇ホール

「音楽を楽しみたい」という気持ちがあれば、どなたでも大歓迎。ホールでの音楽鑑賞に不安がある方、これまで劇場に行ってみたくても機会がなかった方も、それぞれの“心地よさ”を大切にした、素敵なひとときとなるようお届けしました。コンサートの終盤には、2台ピアノ、フルート、ホルンの多彩な響きにあわせて、お客さまも手拍子や簡単な振り付けで参加できるコーナーがあり、会場では自然と一体感が生まれました。

また、「見える音楽」ともいわれるサインポエムのパフォーマンスもあり、伝わる詩や想いを皆さんにご体感いただきました。小さなお子さまから大人の方までリラックスした雰囲気で過ごされ、客席は終始あたたかな笑顔に包まれました。「子どもと一緒に安心して楽しめた」「初めて見たサインポエムがとても素敵でした」といった声も寄せられ、誰もが気兼ねなく音楽を味わった公演となりました。

3 パイプオルガン見学・体験会「オルガンふしぎ発見！」

11月8日（土）・9日（日）　アイザックスターンホール

劇場のパイプオルガンを、見て・聴いて・体験できる特別企画。親子、子ども、大人の各クラスが次々と参加し、充実した2日間となりました。オルガンの演奏やクイズを通して楽器の魅力に触れたあとは、普段入ることのできないオルガンの内部や演奏台を間近で見学！さらに、水オルガンの実験やふいご体験など「音が鳴るしくみ」を知るコーナーもあり、子どもから大人まで思い思いに楽しむ姿が見られました。

希望者を対象とした試奏体験では、ほとんどの方がオルガンに触れるのは初めてで、緊張の面持ち。それでも弾き終えると、「緊張したけど楽しかった」「感動した！また弾きたい」と話す姿が印象的でした。劇場でしかできない見学・体験を通して、パイプオルガンをぐっと身近に感じられるひとときになりました。

4 インドネシア伝統芸能団ハナジョス ガムラン・パーティー！

12月14日（日）イベントホール

本公演に先立ち、11月には日南市飫肥の小村寿太郎記念館、「神武さま」の神々の舞ステージ、都城市Mallmall内まちなか広場の3か所で、インドネシア伝統芸能団ハナジョスの2人によるインドネシア・ジャワの伝統芸能を楽しむ無料プレ公演を開催しました。

12月の本公演は劇場のイベントホールで実施。開演前の会場外には、ジャワ島の伝統的な染め布・バティックや木偶人形、お面などが並び、ワークショップ参加者による竹の楽器・アンクルンの合奏で幕を開けました。ガムランや舞踊、影絵芝居などの多彩なプログラムで、子どもから大人まで夢中で伝統芸能を楽しみました。終演後は、舞台上で楽器や人形に触れ、出演者に直接お声かけされる方もいらっしゃいました。

まとめ

30 周年を記念してお届けした４つの特別プログラムには、たくさんの笑顔と温かい時間が溢れていました。
ご来場いただいた皆さま、そして宮崎県立芸術劇場を支えてくださってきたすべての皆さまに、心より御礼申し上げます。
これからも、多様な表現と出会いが生まれる劇場であり続けられるよう、歩みを進めてまいります。
引き続き、宮崎県立芸術劇場をどうぞよろしくお願いいたします。

ついに発表！
第31回宮崎国際音楽祭
宮崎に“音と舞いが響き合う春”がやってきます。

宮崎国際音楽祭総監督
松坂 千尋
（宮崎県立芸術劇場館長）

令和８年４月26日（日）～５月17日（日）に開催される
第31回宮崎国際音楽祭の情報が、先日発表されました。
今回のテーマは「音、舞い、その先へ」。
春の宮崎に訪れる、音楽祭ならではの特別なひととき。
どんな演奏や舞台が繰り広げられるのか――。
今回の音楽祭について総監督の松坂館長に話を聞きました。

――前回の第30回宮崎国際音楽祭を館長として初めて迎えられた際、どんなことを感じられましたか？特に印象に残っている場面などがあれば、聞かせてください。

一昨年29回の音楽祭は広域開催という特別な形でしかも見る側でしたので、30回の去年、初めて本格的に音楽祭に関わりました。主催する側でしたので、皆さんに少しでも楽しんでもらえればと思いながら、毎日毎日過ごしていました。30回という節目で印象に強く残ったのは、世界的指揮者のチョン・ミョンフンさんが、心温かい指揮・指導をされるということと、最終日の県民合唱参加の第九の盛り上がりですね。ホールを包んだ独特の雰囲気と熱気が、すごく印象に残っています。

――そして今回、第31回宮崎国際音楽祭の全容が発表となりました。総監督としてこの春を迎える今、どんな思いを持っていますか？

プログラムをどのように企画していくかは、

かなり前から準備していく必要があると改めて感じています。演奏家の人たちのスケジュールもありますし、設備の設定やリハーサルなど、準備は大変だなというのが正直な感想です。音楽祭まで３か月しかありませんが、この間に魅力・見どころを多くの方に伝えて、「これ行ってみたいな」と思ってもらう努力をしていきます。

――総監督という役割について、ご自身はどのように向き合っていますか？

音楽や演奏については音楽監督に任せていますので、公演の全体的なバランスをみるとか、見どころをどのように伝えていくのか、どのように皆さんをお迎えするかが、一番重要だと思っています。

――“宮崎国際音楽祭”や“劇場”を、改めてどのような存在として感じていますか？

音楽祭を30回も続けるのは、どこにでもあることじゃないと聞いています。演奏家の熱のこもった演奏に加えて、県民の方の支えがあってこそ、続いてきたんだと思います。宮崎の貴重な財産である音楽祭を、引き続き楽しんでもらい、どのように続けていくか、伝えていくか。新しいことも取り入れながら、続けてきたことを守っていきながら、というのが大切だと思っています。

――総監督・館長として日々大切にされていることや、今後こうしていきたいという目標があれば聞かせてください。

劇場は文化の発信拠点ですが、来ていただく方をおもてなしする場だとも思っています。来ていただいて、ちょっと違う気づきがあるとか、少し違った体験ができたとか、楽しめたとか、そういう感想や気持ちを抱いていただく。そのために、いかに皆さんを気持ちよくお迎えするか、工夫を凝らしたプログラムを提供していくか。来ていただく方があっての劇場が基本だと思うので、迎える側、企画する側としては、演奏家も含めて、そういう気持ちで臨むことが大切だと思います。

――今回の音楽祭は、どんな景色を見せてくれるのでしょうか。見どころや新たな試みについて伺えますか？

見どころは、絞ると3つかなと思っています。1つはバレエとのコラボレーションです。三浦音楽監督は、音楽と何かが生み出すコラボに取り組みたいと思っていて、30回は音楽と映像のコラボでしたが、今年はバレエとのコラボです。世界的なバレエダンサーが宮崎に来て、室内楽やオーケストラと共演します。

5月14日（木）演奏会〔3〕バレエ×室内楽「美の響宴」は室内楽とバレエの共演で、よく知られているバレエ音楽などをちりばめた、いわゆる“良いとこ取り”公演。最終日5月17日（日）演奏会〔5〕バレエ×オーケストラ「華麗なる新たな挑戦」はオーケストラとの共演で、著名なバレエの見せ場を男女２人が踊る、いわゆる「グラン・パ・ド・ドゥ」に加えて、バレエ音楽ではない曲に独自の振り付けをする注目のプログラムがあります。“三大ヴァイオリン協奏曲”の1つといわれるメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲ホ短調。多くの方が聴いたら「あの曲か」と思われると思いますが、その曲に世界で宮崎にしかない振付がつけられ披露されます。踊り手も世界的な方々ですし、バレエとオーケストラが創り出す新たな空間を楽しんでいただきたいです。

見どころの2つ目は、これまでも音楽祭の柱だった室内楽やオーケストラの公演です。三浦音楽監督が宮崎に来ることを強く望んだ世界的な演奏家が来ます。“鍵盤の詩人”と言われるポーランドのピアニスト、ピョートル・アンデルシェフスキさん、ヴィオラの英雄といわれるフランスのアドリアン・ラ・マルカさん、台湾のヴァイオリニスト、ポール・ホアンさんなどです。

２つのオーケストラ公演のうち5月10日（日）演奏会〔2〕オーケストラで描く「深き陰影と若き息吹」は、韓国の世界的な若手指揮者サミュエル・リーさんがタクトを振ります。5月16日（土）演奏会〔4〕ジュピター＆ヤマト「天空のシンフォニー」の2回目のオーケストラ公演は、ちょっと変わってまして、モーツァルトの著名な交響曲「ジュピター」に加えて、アニメ『宇宙戦艦ヤマト』をテーマにした「交響曲宇宙戦艦ヤマト」です。「交響曲ヤマト」は、アニメのテーマも出てきますが、本格的な交響曲です。亡くなられた羽田健太郎さんが作られたのですが、音楽祭の前監督の徳永二男さんが初演時にヴァイオリンを演奏されたということで、今回徳永さんにも演奏に加わっていただくほか、演奏前に当時の想いなどもお聞きしますので、一味違う楽しみ方をしていただけるのではと考えています。

３つ目の見どころは、5月6日（水）屋外で開催する「かがり火コンサート」です。三浦音楽監督の「特別な空間での鑑賞体験を、ぜひ味わっていただきたい」という思いから、劇場近くの宮崎神宮で夕闇深まる中、フルートや弦楽器を聴いていただき、かがり火の雰囲気も含めて楽しんでいただければと思います。

この他に、新しい取り組みとしては、短時間で人数は絞らざるを得ないので抽選になりますが、オーケストラ公演のリハーサルを公開します。また高校生サポーターを募集し、コンサートの時のいわゆる影アナウンス、受付などに参加してもらい、若い人と一緒に音楽祭を作り上げることに取り組みたいと思います。更に宮崎市内までは行きにくいという方のために、メイン演奏会のうち1つは他の地域で開催します。今回は、5月14日（木）演奏会〔3〕バレエ×室内楽「美の響宴」を都城で行います。

――今回のテーマ『音、舞い、その先へ』には、どのような思いが込められているのでしょうか？

宮崎国際音楽祭は、室内楽もオーケストラも、音が素晴らしいと思っています。ホールの音響の良さに加え、オーケストラメンバーも去年から若返り、美しく調和の取れた、迫力のある音を出します。そうした音に今回は「舞い」という、世界的バレエダンサーとのコラボレーションがあります。それらが共鳴して生み出す“その先の何か”を楽しんでいただきたいという思いを込めました。

――これまでの経験の中で“音楽っていいな”と感じたエピソードはありますか？

個人的にはポップスが好きなんですけどね。元々フォークの世代なんで。クラシックについて1つ思うのは、宮崎のホールって何かが伝わってくる感じが素晴らしいですね。綿密に計算されてホールが作られているので、特別な空間にいる気がして、「音楽っていいな」と思いますよね。

――クラシックを難しく感じている方が、気軽に楽しむための“最初の一歩”はどこにあると思われますか？

敷居が高い、自分とは縁がないと思われている方も、一度体験していただければと思っています。今、スマホやCDで音楽は簡単に聴けますが、アーティストが渾身の想いで演奏する姿と、ホールいっぱいに響く生の音、そして感動にひたる聴衆。そこから生まれる何か。一度、騙されたと思って、その空間に浸っていただくと、様々な発見があると思います。知り合いのひとりがホールでヴァイオリンを聴いたときに、「こんなに響くのか。やっぱりすごいなあ」と感動していました。“生”の演奏を一度体験していただくことが、クラシック音楽を楽しんでいただく一つの手段かなと思うんです。

――最後に、音楽祭を楽しみにされている皆さまへ、そしてまだ訪れたことのない方へ、総監督からメッセージをお願いします。

今年も様々なプログラムを用意しています。いろいろお忙しいと思いますし、楽しみ方や、時間の使い方は様々だと思いますが、「ちょっと音楽祭行ってみようかな」と劇場に来ていただくと、体験したことのない何かに出会えるのではと思います。気軽な気持ちで来て楽しんでいただきたいです。

開催情報
第31回宮崎国際音楽祭
令和８年４月26日（日）～５月17日（日）
会場 メディキット県民文化センター ほか

メディキット県民文化センター（宮崎県立芸術劇場） 自主事業公演チケット情報 2026年

2/1（日） 14:00開演 イベントホール	**加藤昌則の「粋なり！クラシック」** 【出演】加藤 昌則（ピアノ・ナビゲーター）、福川 伸陽（ホルン） **全席自由**　一般 2,000円（1,800円）　U25割 1,000円　※未就学児入場不可	チケット発売中
2/8（日） 14:00開演 アイザックスターンホール	**第51回九州公演 日本フィル in Kyushu 2026 宮崎公演** 【出演】藤岡 幸夫（指揮）、周防 亮介（ヴァイオリン）、日本フィルハーモニー交響楽団（管弦楽） **全席指定**　S席：7,000円　A席：6,000円　B席：4,000円　U25割：各席種半額　※未就学児入場不可	チケット発売中
2/14（土）・2/15（日） 14:00開演 イベントホール	**'25みやざきの舞台芸術シリーズⅢ** **体感型コンサート ～オーケストラで旅する名曲の世界～**　0歳から入場OK! 構成・編曲：服部 響　指揮：土田 浩 出演：かみもと 千春（劇団こふく劇場）、日髙 啓介　演奏：Nova Harmonia（ノヴァ・ハルモニア） **全席自由・日時指定**　一般 2,000円（当日2,500円）　高校生以下 1,000円（当日1,500円）　未就学児無料	チケット発売中
2/23（月・祝） 14:00開演 演劇ホール	**ひなたのバロック #7 メランコリーの森** 【出演】大塚 直哉（チェンバロ・お話）、平尾 雅子（ヴィオラ・ダ・ガンバ）、トークゲスト：森下 勇矢（ドイツ文学研究者） **全席自由**　一般 2,000円（1,800円）　U25割 1,000円　※未就学児入場不可	チケット発売中
3/14（土） 11:00開演 アイザックスターンホール	**パイプオルガン プロムナード・コンサート vol.177　「オルブラ」**　4歳から入場OK! 【出演】原田 真侑（オルガン）、伊豆 謡子（司会・進行） **全席自由**　4歳以上500円　なかよしチケット700円※4歳以上2人1組（前売りのみ）	チケット発売中

Attention（ご注意）
◎記載情報は変更になる場合があります。◎（　　）内はくれっしぇんど倶楽部会員価格です。◎U25割は鑑賞時25歳以下が対象。その他の割引サービスの詳細は、劇場HPをご覧ください。
◎当日券が出る場合は、一般チケットのみ500円増になります。※一部公演除く◎託児サービス（有料・事前申込要）がご利用いただけます。※一部公演除く

ご存知ですか？

劇場で世界レベルの音楽レッスンを間近で聴けるチャンス！

メディキット県民文化センターにて、毎年開催される「ミュージック・アカデミー in みやざき」。

世界で活躍するヴァイオリニストを講師に迎え、日本全国から集まった若き受講生たちのレッスンを、一般の方も間近で聴くことができます。

弓の角度や体の使い方、音の出し方など、講師のアドバイスひとつで、演奏の音色はみるみる変わります。受講生の真剣な表情や、講師がどう考えて音を導いているかを感じられるだけでなく、目の前で講師自身の音を聴けるのも、大きな魅力です。

音楽が育つ様子、学びの熱気、演奏が少しずつ変化していく過程――普段のコンサートでは味わえない、特別な時間を体感してみませんか？

第18回 ミュージック・アカデミー in みやざき2026

- 期間：2026年3月21日（土）～3月29日（日）
- 会場：メディキット県民文化センター地下練習室
- 講師：三浦文彰、徳永二男、チェン・シ、長原幸太

聴講のご案内

- 当日、1階チケットセンター前で受付
- 聴講料：一般 1,000円（1日有効）／25歳以下 無料

※25歳以下の方は身分証をご提示ください。
※就学前のお子様はご遠慮ください。

レッスン時間割・受講曲

- 前日夜に劇場HP【最新情報】で発表
- 当日の聴講受付でも配布があります。

お問合せ
公益財団法人 宮崎県立芸術劇場 MIYAZAKI PREFECTURAL ARTS CENTER
〒880-8557 宮崎市船塚 3-210
https://miyazaki-ac.jp/
TEL.0985-28-3208　FAX.0985-20-6670
随時更新中！「フォロー」と「いいね！」お待ちしています

企画・制作・発行／公益財団法人宮崎県立芸術劇場　宮崎県宮崎市船塚3-210　TEL0985-28-3208
印刷・製本／株式会社イースト朝日　宮崎支店　宮崎県宮崎市祇園2丁目117番地　TEL0985-72-5055